

## 両親イメージが自己イメージに与える 影響に関する調査研究

橋本佐由理\* 樋口倫子\* 中野智美\*\*

The Research about the Influence that one's Image  
of their Parents Gives the Self-image

Sayuri Hashimoto, Noriko Higuchi

Graduate School Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

Tomomi Nakano

Middle Way GSH Co.,Ltd

### Purpose :

The purpose of this research is to examine the relationship between one's image of their parents and their self-image, while accessing the applicability of each to mental health.

### Method :

By administering a questionnaire to 599 subjects, we investigated their image of their parents and self-image. The survey took place between April 2002 and October 2003. Demographics of the sample population were as follows : subjects were students for helping professions (sex ; man 274 (45.7%) woman 325 (54.3%), age ;  $20.83 \pm 2.42$  years old). A self-esteem scale and a self-denial scale were used to measure self-image. We analyzed the reliability, factorial validity and criterion related validity of the data to create a hypothetical model. We confirmed the accuracy of the model by applying covariance structure analysis.

### Results :

1. The reliability, factorial validity, and criterion-related validity were indicated in all scales.
2. The self-esteem of the subjects was extremely low as a whole, while the self-denial score was slightly high.
3. As a result of confirming a hypothetical model by covariance structure analysis, one's good image of their parents had a significant influence on self-image. A good self-image had significant influence on good mental health. There was no significant direct influence between

---

\*筑波大学大学院ヒューマンケア科学

\*\* (株)ミドルウェイ ジーエスエイチ

one's image of their parents and one's mental health.

4. Gender comparisons of male and female students revealed that their image of their parents plays a significant role in influencing their self-image. This influence was stronger with female students.

#### Conclusion

As a result of this research, we determined that the cognition of one's image to their parents has an influence on their self-image.

#### キーワード

両親イメージ one's image of their parents

自己イメージ the self-image

精神健康度 mental health

共分散構造分析 covariance structure analysis

## I. はじめに

自己イメージは、「人が自分自身を客体化したときに、自分自身に抱いている考え（東他，1995）」や「行動の内的準拠枠（基準）（片野，2001）」と言われている自己概念の構成要素の一つである。この自己イメージとは、主体的な自我によって、そのときどきの状況で自分と思われる全体としての現象的自己のなかで比較的恒常的に自己と認められるもの全体のことであり、「人がどのような行動を、どのように行うかは、その人がどのような自己イメージを抱いているかによって左右されることが多い」（梅津他，1981）と言われている。自己イメージは人間行動に関わるものなので、自己イメージに影響を与える要因の検討や自己イメージをいかに変容するかは重要な課題であるといえる。

宗像（2000 a，2000 b）が開発したSATカウンセリング法及びSATイメージ療法を活用したカウンセリング実践においては、両親イメージの良し悪し

が自己イメージに影響を及ぼすことが明らかになっている。SATカウンセリング法及びSATイメージ療法では、過去の心傷体験や世代を越えて伝わってきたマイナスイメージをプラスイメージへとイメージ変換すること及びマイナスイメージの体験から再学習をすることで解決の方向へ向かう。その際に重要他者、特に両親イメージの変換をする技法が重要になる。これまでに問題解決を望むクライアントを対象としたカウンセリング事例から、両親をはじめとする重要他者に対するイメージをプラスイメージへと変換することが、恐れや怖さの根源感情を軽減し、自己イメージのプラス変換につながるということがわかっていく。すなわち、両親イメージの変容が自己価値感や自己否定感といった自己イメージの変容とかかわっていることについて、カウンセリング実践事例研究により質的検証がなされてきたのである（ヘルスカウンセリング学会、1997、1998、1999、2000、2001）。このようにクライアントに対しての検証結果はあるが、それ以外の一般の人々において両親イメージの良し悪しと自己イメージとの関連についての量的な調査研究は見当たらない。また、本研究者が、講演やセミナー、大学等での講義の際に次のように尋ねてみたところ、両親イメージと自己イメージとは関連があることが伺えた。それは、「もし、両親が運命の糸で結ばれたベストカップルで仲が良く何でも話し合える関係で、自分のことをいつでもどんな時でも見守ってくれ、無力な時には必ず助けてくれるとイメージすると、自分の今の気持ちや生きる力、エネルギーはどうか？」と尋ねると、安心して生きる力が湧き、何事にもチャレンジするようなエネルギーが湧いてくると答える者が多かった。「では、その逆にいつも両親が喧嘩ばかりしていて、自分に対してマイナス面ばかりを指摘し、失敗をすると非難するというような両親をイメージするとどうか？」と尋ねると、不安でエネルギーが湧かず、何もやる気になれないと答える者が多い。このように関連があることは伺えるが、それを量的に証明したデータはない。そこで、両親イメージを調査票で測定し、それが自己イメージに与える影響力について検討することを考えた。

本研究では、自己イメージの測定に自己価値感及び自己否定感を用いた。質

問紙調査法により両親イメージの良し悪しと自己イメージや精神健康度との関連について量的に検証すること、そして、性差により両親イメージが自己イメージに与える影響に差がみられるか否かについても明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究対象と研究方法

### 1. 研究対象

関東圏内の大学や専門学校に通う学生で、対人援助職（医師，歯科医師，看護師，保健師，教師）の専門資格取得を目指している学生を対象とした。学生を対象として選んだのは、今回は両親イメージが自己イメージに与える影響を検討することを目的としているため、両親以外の重要他者である配偶者や子どもという自己イメージに影響を与える要因を持つ対象を排除しやすいと考えたためである。対象とした大学や専門学校は、5校で延べ9クラスである。最終的に協力の得られた調査対象者は659名であった。回収された調査票のうち、性別や年齢が未記入であったものを除き、配偶者がいるものも除いた。そして、年代を10歳代と20歳代に絞り、30歳代以上の者も除くこととした。その結果、有効回収数は  $n = 599$ （有効回収率90.9%）であった。

その性別の内訳は、男子学生274名（45.7%）、女子学生325名（54.3%）であった。全平均年齢は、20.83歳（S.D.=2.42）、男子学生21.14歳（S.D.=2.54）、女子学生20.57歳（S.D.=2.28）であった。

### 2. 研究方法

#### ①調査実施時期と方法

2002年4月から2003年10月に行った。記名（暗号でも可）自記式質問紙調査票を用い、授業時に説明後配布し、翌週あるいは翌々週に回収した。

#### ②調査票の構成

質問紙調査票の内容は、属性（氏名あるいは暗号、性別、年齢）及び両親イ

メージを測定する質問と家族内の情緒的支援認知を測定する尺度、自己概念を測定する2尺度、及び精神健康度を測定する2尺度から構成されている。使用した尺度は以下の通りである。

- 1) 父親に対するイメージ尺度 (40項目) …カウンセリング事例から両親イメージの変換においてクライアントから得た両親イメージの情報を元に作成している。明るい、面白い、理解してくれる、関心を持ってくれる、暖かい、やさしい、尊敬できる、かっこいい、頼りがいがある、積極的、素敵、慎重、力が強い、まじめ、太っ腹、ありがたいの16項目の良いイメージ、暗い、冷たい、我慢強い、受け入れてくれない、理解してくれない、厳しい、怖い、みっともない、見守ってくれない、関心を持ってくれない、うるさい、子どもっぽい、いいかげん、不器用、頑固、自意識過剰、わがまま、疲れている、無口、神経質、気難しい、過保護、過干渉、臆病の24項目の悪いイメージからなっており、質問紙では良いイメージと悪いイメージを混在させてある。
- 2) 母親に対するイメージ尺度 (40項目) …父親と同じものである。
- 3) 情緒的支援ネットワーク尺度 (10項目, 宗像, 1996) …家族からの情緒的支援をどのくらい認知しているかを測定する。得点の解釈は、0～5点は低い (家族からの支援をあきらめている)、6～8点が中程度、9～10点を高い (自分を認め愛してくれる人がいると感じている) とみる。
- 4) 自己価値感尺度 (10項目, 宗像他, 1987) …自分に対してどのくらいプラスイメージがあるかを測定する。自分に自信があり、自分に価値を見いだしていればいるほど得点が高くなるようになっている。自己免疫力との関連がある。得点の解釈は、0～6点は低い (自分への価値感が低い)、7～8点が中程度、9～10点を高い (自分に満足している) とみる。
- 5) 自己否定感尺度 (10項目, 宗像, 2000) …「自分が存在している意味がないと思う」等の10項目からなっており、自分に対してどのくらいマイナスイメージがあるかを測定する。自分に自信がなかったり、自分を信じることに怖さを持っていると得点が高くなる。自分を解放したり、改善す

ることへの意欲と関連がある。得点の解釈は、0～2点は弱い、3～4点  
が中程度、5～20点を強いとみる。

6) 特性不安尺度 STAI (20項目, Spielberger, 1970) …不安を感じやすい  
傾向の強さを測定する。

7) 抑うつ尺度 SDS (20項目, Zung, 1960) …抑うつ傾向を測定する。

### ③分析方法

得られたデータは、SPSS11.0により統計的に処理をした。分析方法は、尺  
度の因子分析及び信頼性分析、基準関連妥当性分析を行った。また、仮説モデル  
を構築し、Amos4.0を用いて作成したモデルに関して共分散構造分析を行い、  
その適合度を検討した。

表1 各尺度の平均得点および信頼性分析と基準関連妥当性分析、因子分析の結果

尺度	記述統計		信頼性係数	妥当性係数	
	平均得点	標準偏差	クロンバッハの 標準化 $\alpha$	特性不安との 相関係数 $r$	抑うつとの 相関係数 $r$
自己価値感 (10項目10点満点)	5.28	2.38	0.74	-0.61 **	-0.52 **
自己否定感 (10項目20点満点)	3.80	3.41	0.73	0.56 **	0.55 **
父親の良いイメージ (14項目28点満点)	15.42	6.38	0.89	-0.16 **	-0.26 **
父親の悪いイメージ (21項目42点満点)	9.10	6.02	0.82	0.25 **	0.24 **
母親の良いイメージ (15項目30点満点)	17.60	5.99	0.88	-0.18 **	-0.24 **
母親の悪いイメージ (20項目40点満点)	7.85	5.19	0.79	0.23 **	0.20 **
情緒的支援ネットワーク (10項目10点満点)	7.98	2.61	0.85	-0.26 **	-0.31 **
特性不安 (20項目80点満点)	49.78	10.91	0.90		0.76 **
抑うつ (20項目80点満点)	41.52	8.07	0.80	0.76 **	

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査票の尺度の検討

調査票の尺度の信頼性分析と基準関連妥当性分析、因子分析の結果を表1に示した。

両親イメージ尺度は、両親イメージを表している40項目のそれぞれの項目に関して、父親と母親のそれぞれを別々に「非常にあてはまるもの」と「あてはまるもの」、「あてはまらないもの」の3段階で回答を得た。「非常にあてはまるもの」に2点、「あてはまるもの」に1点、「あてはまらないもの」を0点と

因子分析			父親母親イメージ35項目での分析結果			
第1因子固有値	第1因子寄与率	累積寄与率(因子数)	第1因子固有値	第1因子寄与率	累積寄与率(因子数)	クロンバッハの標準化 $\alpha$
2.02	20.17	39.51(2)				
2.56	25.89	40.73(2)				
3.75	26.80	45.85(2)				
2.15	10.25	43.49(5)	5.23	14.93	48.22(7)	0.76
2.56	19.73	45.38(3)				
1.74	8.69	40.19(6)				
2.33	23.29	43.11(2)	5.48	15.65	44.21(8)	0.78
3.24	16.20	48.72(4)				
2.32	11.59	36.84(6)				

\* 因子分析は主因子法バリマックス回転により行った。

\* 基準関連妥当性は特性不安と抑うつを外的基準としたときの相関係数を基準関連妥当性係数とした。

\*\*  $p < .01$

して得点化した。そして、父親イメージ及び母親イメージのそれぞれを別々に因子分析を行い、共通性が0.2よりも低かった項目を除いた。また、我慢強い（カウンセリング事例より、親の我慢強さは子どもにも我慢をさせ、自己を抑えさせるため心傷体験を重ねやすいことがわかっている）という項目のように尺度作成上では、悪いイメージを意図して設けたが、それが良いイメージとして因子が構成されるというような、こちらの意図と異なった項目は除いた。また、因子負荷量が0.3よりも小さい項目を除いた。父親母親どちらも5項目ずつ削除され（父親は、力が強い・まじめ・我慢強い・不器用・疲れている、母親は、まじめ・我慢強い・見守ってくれない・疲れている・無口）、35項目で父親及び母親イメージ尺度を構成した。父親の良いイメージは14項目（28点満点）、悪いイメージは21項目（42点満点）、母親の良いイメージは15項目（30点満点）、悪いイメージは20項目（40点満点）である。両親イメージ尺度は、35項目全体と良いイメージと悪いイメージに分けたものとの両方で信頼性分析と因子分析を行った。

信頼性係数としてクロンバッハの標準化 $\alpha$ を算出した結果、すべての尺度において0.7以上得られていた。外的基準として理論的に相関が見られると考えられる、特性不安尺度と抑うつ尺度との相関係数を基準関連妥当性係数として算出したところ、すべて有意な相関が得られていた。因子分析の結果は、第1因子固有値はすべて1以上であり、寄与率も高かった。

## 2. 対象者の特徴

各尺度の平均得点を表1に示した。対象者は、自己価値感の平均得点が5.28点と低く、自己否定感は3.80点とやや高めであった。特性不安は49.78点で不安に感じやすい傾向を持っていると言えた。

## 3. 両親イメージと自己イメージおよび精神健康度の関連に関するモデル

はじめに述べたように両親イメージの変容が自己イメージの変容と関わっていることから、父親の良いイメージと悪いイメージ、母親の良いイメージと悪



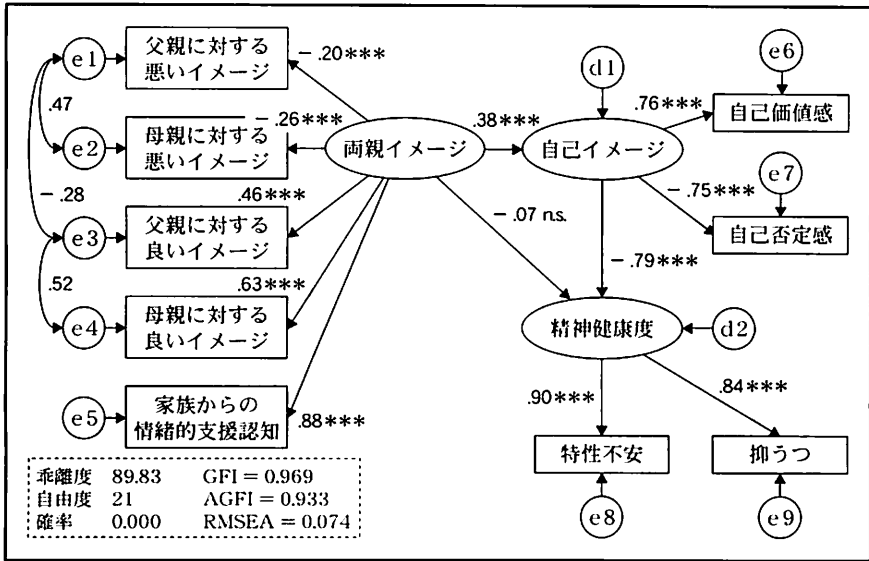


図1 両親イメージと自己イメージ及び精神健康度の関連

いイメージ、家族からの情緒的支援認知の5つの観測変数からなる潜在変数を両親イメージとした。そして、自己価値感と自己否定感の観測変数からなる潜在変数を自己イメージとした。特性不安と抑うつという観測変数からなる潜在変数を精神健康度とした。両親イメージから自己イメージと精神健康度へのパスと自己イメージから精神健康度へのパスを引いたモデルを立て、共分散構造分析によりその適合度と変数間の推定値を算出した。その結果、図1に示したような適合度と変数間の推定値が得られた。全体の適合度は、ほぼ良い適合度を得られた。部分的評価については、両親イメージから精神健康度へのパスを除いてはすべて有意であった。

#### 4. 両親イメージが自己イメージに与える性差による影響について

男子学生と女子学生の性別の違いによる2集団において、モデルの変数間の推定値に差がみられるか否かを検討するために、2つの母集団の同時分析を行った。その結果、男子学生は図2、女子学生は図3に示したような適合度と変数

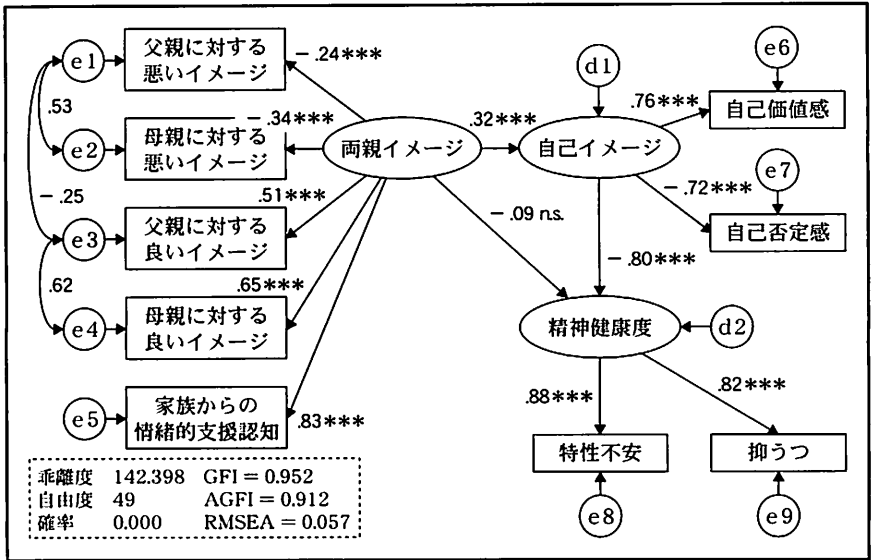


図2 両親イメージと自己イメージ及び精神健康度の関連 (男子学生)

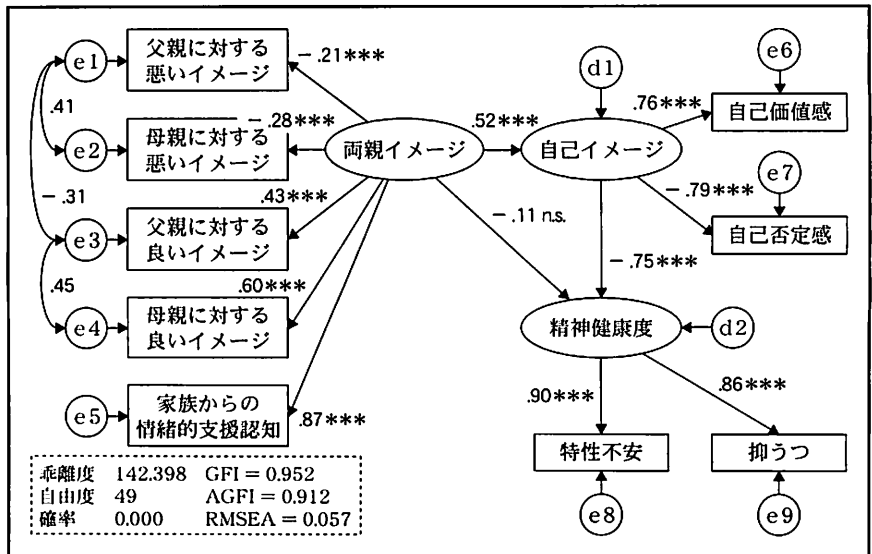


図3 両親イメージと自己イメージ及び精神健康度の関連 (女子学生)

間の推定値が得られた。男子学生と女子学生とでは、両親イメージから自己イメージへのパスに有意な差がみられた（パラメーター間の差に対する検定統計量2.061,  $P < .05$ ）。

#### IV. 考察

##### 1. 両親イメージと自己イメージや精神健康度との関連について

今回、両親イメージと自己イメージ及び精神健康度の関連について検討するために用いた尺度は、ほぼ満足な信頼性と妥当性が得られ、調査に使用しうる尺度であると判断した。

両親イメージと自己イメージに関しての質的研究から言えば、カウンセリング実践事例において、過去の両親イメージを良好なイメージに変容できると、恐れや怖さというような根源感情の軽減ができ、自己価値感が高まり、自己否定感は低下することが実証されている（宗像, 2001）。もう少し詳しく記述すると、それは、①現在の恐れや怖さは、過去の恐れや怖さのマイナスイメージが現在へフラッシュバックしていることでおこっている。②そのマイナスイメージの変換には、例えば幼少期よりももっと以前の胎内期のイメージやもっと前世代からのイメージがフラッシュバックしていることも多いため、父、母のイメージを変換することが必要になる。未解決課題の世代間伝達がフラッシュバックをおこさせていることから、その解決のためには、祖父母や曾祖父母に世代週及し、再養育イメージ法（宗像, 2002）を活用することにより父母のイメージを変換する。③すると、近赤外線酸素モニター装置での測定によれば、酸素濃度が濃くなる部位が変化するという中枢神経系の活動変化がおこることがわかっている。④また、過去のイメージを想起すると身体が緊張したり、ドキドキする等のさまざまな情動発現があるが、イメージ変換するとそれが消失する。それはカウンセリング前後における生化学検査の結果にも表れており、末梢神経活動や内分泌活動、免疫活動にも有意に影響していることを示している。⑤

このようにイメージ変換がなされると前述のような変化や反応を伴いながら、自分のそれまでのストレス行動特性やストレスをためやすいパーソナリティーを変えることができるのである。このような世代間伝達の考え方とその解決に関して、reflective selfの概念を研究したFonagy P.ら（1991）は、運命論的に見える葛藤や精神病理の世代間伝達の治療的介入の可能性として、自分の葛藤やトラウマについて自分を共感的に理解してくれる人との信頼関係の中で、じっくりと振り返りねぎらうことができるときに、葛藤の連鎖が防げることを述べている。また、愛着理論によれば、愛着障害の世代間伝達が知られており、親の感受性が乳児の愛着の性質を決める鍵となっており、人生早期の母性的養育の必要が言われている（Izendoorn M, 1997）。日本においても、渡辺（2002）は、戦中戦後のわが国における対象喪失の未解決葛藤が、世代間伝達により孫の代の養育体験に影を落としているケースを研究している。このように心の葛藤の世代間伝達の存在とその問題への取り組みの重要性が増している。

本研究者らのカウンセリング実践時にも、クライアント本人の自己決定力を取り戻すためにトラウマ感情のマイナスイメージを癒しにより軽減する際、世代間伝達された未解決課題の解決が必要であることが多く、再養育イメージ法（2001, 2002）による両親イメージの変容は重要となる。先述の宗像（2001）の先行研究等からも両親への過去のマイナスイメージの変換が、現在の自己イメージの変容に影響していることがわかるが、これまでにそれが量的に検証されてはいない。また、両親イメージそのものと自己イメージそのものの関連についても検討されていない。そこで、現在の自分が持っている両親イメージが、現在の自己イメージに直接関係しているかどうかを本研究では量的に検討することを試みた。

今回の研究では、自己イメージの測定には、自己価値感と自己否定感の2つの指標を用いた。自己価値感が高まることは、自らを肯定することからの安心感や開放感、問題解決への意欲や自信につながる。自己否定感が弱まることも同様の関連がある。本研究の対象者は日本人大学生であるが、調査の結果、対象者の自己イメージとして自己価値感全体として大変低く、自己否定感はや

や高かった。すなわち、自分に対してプラスの評価が少なく、自信がなく、自己の存在価値を見いだせずにいる学生が多くいるということになる。古澤 (2000) の日本人と帰国子女、日系米国人、白系米国人の青年期の自己有能感の比較研究でも、それぞれの大学生が有能感をどのように評定しているかをみた結果、すべてにおいて白系米国人よりも日本人が低かったと報告されている。Schwarzer R. (1997) らの中国人、インドネシア人、日本人、韓国人版の一般的な自己効力感の比較を行った結果では、自己効力感には違いがみられ、性別と言語との相互作用があることが明らかになったと報告されている。したがって、日本人の自己イメージの認知の悪さは文化的な背景にも関連していることは確かであるが、やはり全体としては先行研究で述べられているように、日本人学生の自己イメージが悪いことを支持する結果となった。

重要他者のイメージと自己イメージとの関連では、次のような調査結果がある。Thompson J.M.ら (2001) の抑うつ症状と両親やパートナーといった重要他者の認知との関連の報告によれば、自身のパートナーを批判的で我慢強さがなく、切れやすい人だと認知している女性は、抑うつになりやすいこと、また、男性では自己を抑える傾向は、父親に対して冷たくて拒否的だという認知があることと、恋の対象のパートナーが批判的で人の意見を認めようとしないと認知されていることの両方が関係していたことを述べている。摂食障害に関するこれまでの研究によれば、母子関係の重要性が述べられている (一條他, 1999; 松木, 1985)。岡本ら (2003) は、Bulimia Nervosa と父親イメージに関する臨床研究を行い、攻撃的な父親イメージを持つ群において、ストレスに対して客観的、計画的な行動をとりにくい傾向にあることが伺え、自尊感情の得点が有意に低く、性的虐待体験が認められることや母親イメージが弱いと回答したものが多かったことを報告している。Sim T. N. (2000) は思春期の青少年に対して調査を行い、両親への評価は、心理社会的能力に対してはプラスに関連し、自尊心ともプラスに結びついていたこと、そして、反社会的なものに影響を受けやすい性格とはマイナスに結びついていたと報告している。本研究の結果では、両親イメージは、自己イメージに有意な影響力を持ち、自己価値感の高さ

や自己否定感の低さと両親イメージの良さは、有意に関連していた。そして、自己イメージの良さは、精神健康度の良さに有意に影響力を持っていた。両親イメージの良さが直接に精神健康度の良さへの影響力を持たない。したがって、両親イメージの認知が学生自身の自己の肯定的イメージや否定的イメージに対して影響を及ぼしていることが示唆され、それが精神健康度の良し悪しに影響を及ぼしていることが明らかになった。両親に対しての良いイメージの認知は、自己イメージを良好にする。自己イメージの良好さは精神健康度の良好さへとつながる。このことから両親という重要他者の日頃のイメージの認知は、直接自己イメージに関連していることが示唆された。

心の葛藤の世代間伝達への取り組みの際に、両親といった養育者へのアプローチが重要であることはまちがいないが、両親イメージの変容あるいはその前の世代のイメージを変容するような本人へのアプローチの開発も重要と言える。

## 2. 両親イメージが自己イメージに与える影響の性差について

性差により両親イメージと自己イメージとの間の影響力の差異があるか否かを検討した結果、女子学生のほうが男子学生よりも両親イメージの影響を強く受けていることが明らかになった。一般的に摂食障害は女性がほとんどであり、先述したように両親イメージの影響があることが言われている。本研究において、一般の学生においても女性のほうが両親イメージの影響が強いことが示唆された。そこには、文化的背景やこれまでの慣習が関係しているのではないかと考えている。日本においては、男性が家庭外に女性が家庭内にと文化と慣習が歴史的に続いてきたため、女性のほうが両親イメージの影響を受けやすいのではないかと推察している。男性は家庭外へ出て他者と接する機会が多いので、両親以外の心の親のような存在の人に出会うチャンスがあり、他の重要他者からの影響も受けやすかったのではないかと考えられる。したがって、日本においても近年多くの女性が社会進出をし心の親と言えるような人との出会いのチャンスがひろがることや、時代の変化とともにこれまでの家長制度や伝統等のイメージが弱まることで、この両親イメージから自己イメージへの影

響力の性差が減少するのではないかと推察するが、あくまでも憶測の域をでない。今後より詳細な検討をしていかななくてはならない。

### 3. 臨床への貢献と今後の課題

SATカウンセリングでは、抑うつ症状や引きこもり、摂食障害等のクライアントを支援する場合に、周りの家族に対するアプローチを重要視している。クライアント本人の自己価値感を高め、自己否定感を低下させ、自己イメージを良好にすることは、本人の行動の実行や変容に関わっているので重要である。自己イメージを良好にするには、特に本人が自立した生活を営む力がない場合には、その重要他者の力を借りることが効果的であることが調査の上からも裏付けられた。また、本人が自立した生活を営める場合や重要他者である両親との死別や別居等の距離化が可能である場合には、両親に対するマイナスイメージをプラスイメージに変容することができれば、自己イメージを高めることができることが調査の結果から裏付けられたと言える。

カウンセリング臨床の現場で、抑うつや引きこもり、摂食障害等のクライアントのカウンセリングを引き受ける際に、このような問題が家族内に発生したとしても、家族員は本人自身の問題と考え、本人がカウンセリングを受けることで問題の解決につながると考えていることが多い。実際には、両親のカウンセリングによりクライアント本人の環境の改善を図ったほうが、問題の解決に早道であることが多いが、両親自身は自分が影響を与えているとは自覚していないため、自己を変容しようという気はない。本研究の結果は、家族員へのインフォームド Consent の際に、有効な資料となりうると言える。

本研究で残された課題として、なぜ性別により両親イメージが自己イメージに与える影響力に差がみられるのかを詳細に検討することが必要である。また、今後の研究として、両親以外の重要他者の自己イメージへの影響について量的に検討し、その影響力に差異があるか否かを検討すること、及び自己イメージは人がどのような行動をどのように行うかに関わっていることから、実際の行動レベルの測定も併せて行うことで研究を深めていく。そして、両親イメージ

や重要他者イメージを変容するプログラムを開発し、個人や集団に対して効果的に介入しうるシステムの開発を行っていく予定である。

## V. まとめ

本研究では、両親イメージの良し悪しと自己イメージや精神健康度との関連、及び性差の有無について検証することを目的として、対人援助職専門資格の取得を目指す学生を対象に記名（暗号可）自記式の質問紙調査を行った。そして、599名からの有効回答を得た。分析方法は、尺度の因子分析及び信頼性分析、基準関連妥当性分析、共分散構造分析により検討した。

その結果、（１）使用した尺度は信頼性、因子的妥当性、基準関連妥当性が得られていた。（２）対象者の自己価値感は全体として大変低く、自己否定感はやや高かった。（３）仮説モデルを作成し、共分散構造分析により検討したところ、両親イメージの良さは自己イメージに有意な影響力を持ち、自己イメージの良さは精神健康度の良さに有意な影響力を持っていた。両親イメージと精神健康度の間には有意な直接の影響力はなかった。（４）性別により検討したところ、両親イメージが自己イメージに与える影響力には、男子学生と女子学生との間に有意な差がみられた。それは、女子学生のほうが強い影響力を示した。

以上のことから、両親イメージは自己イメージに影響があることが示唆された。

## 引用・参考文献

- 1) Fonagy P.・Steele H.・Steele M. (1991) : Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development* 62 ; 891 - 905.
- 2) Izendoorn M. (1997) : Maternal Sensitivity Is More Important Than Infant Temperament In Shaping The Infant-Mother Attachment Relationship. Paper presented at Australian Congress of World Association of Infant Mental Health.



- 3) Thompson J. M.・Simon F. U. (2001) : Does self-silencing link perceptions of care from parents and partners with depressive symptoms ? *Journal of Social and Personal Relationships* 18 ( 4 ) ; 503 - 516.
- 4) Schwarzer R.・Born A.・Iwawaki S.・Lee Y. M. et al. (1997) : The assessment of optimistic self-beliefs : Comparison of the Chinese, Indonesian, Japanese, and Korean versions of the General Self-efficacy scale. *An International Journal of Psychology in the Orient* 40 ( 1 ) ; 1 - 13.
- 5) Sim T. N. (2000) : Adolescent psychosocial competence : The importance and role of regard for parents. *Journal of Research on Adolescence* 10 ( 1 ) ; 49 - 64.
- 6) Spielberger C. D. et al. (1970) : STAI manual, Palo Alto, Calif, Consulting Psychologist Press (水口公信ら訳, 日本語版STAI使用手引き, 三京房).
- 7) Zung W. W. K. (1960) : A self-rating depression scale, *Arch. Gen. Psychiat.*, 12, 63 (福田一彦ら訳, 日本語版SDS使用手引き, 三京房).
- 8) 一條智康・山岡昌之 (1999) : 摂食障害の臨床, 久保木富房 : 知っておきたい拒食症・過食症の新たな診療. 真興交易医書出版部, pp.63 - 71.
- 9) 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監修 (1981) : 心理学事典. 平凡社, P.279.
- 10) 岡本百合・吉原正治 (2003) : Bulimia Nervosaと父親イメージ—攻撃的な父親イメージが及ぼす影響. *心身医学*, 43 ( 6 ), pp.367 - 373.
- 11) 片野智治 (2001) : 自己概念の育成. *現代カウンセリング事典*, 金子書房, P.352.
- 12) 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保 (1995) : 心理学用語の基礎知識. 有斐閣ブックス, P.167.
- 13) 古澤頼雄 (2000) : 青年期における自己有能感—日本人・帰国子女・日系米国人・白系米国人の比較. *東京女子大学比較文化研究所紀要*, 東京女子大学比較文化研究所Ⅱ編, 61, pp.25 - 54.
- 14) ヘルスカウンセリング学会 (1997) : 気づき, 癒し, 行動変容へのカウンセリング. *ヘルスカウンセリング学会年報*, Vol. 3, 45 - 104.

- 15) ヘルスカウンセリング学会 (1998)：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング。ヘルスカウンセリング学会年報，Vol. 4，43-90.
- 16) ヘルスカウンセリング学会 (1999)：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング。ヘルスカウンセリング学会年報，Vol. 5，49-102.
- 17) ヘルスカウンセリング学会 (2000)：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング。ヘルスカウンセリング学会年報，Vol. 6，15-111.
- 18) ヘルスカウンセリング学会 (2001)：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング。ヘルスカウンセリング学会年報，Vol. 7，41-123.
- 19) 松木邦裕 (1985)：心理社会的立場からみた神経性食思不振症の病因。末松弘行編：神経性食思不振症—その病態と治療，医学書院，pp.45-55.
- 20) 宗像恒次・小森まり子・橋本佐由理 (2000 a)：ヘルスカウンセリングテキスト Vol. I. ヘルスカウンセリングセンターインターナショナル，pp. 1-201.
- 21) 宗像恒次・小森まり子・橋本佐由理 (2000 b)：ヘルスカウンセリングテキスト Vol. II. ヘルスカウンセリングセンターインターナショナル，pp. 1-233.
- 22) 宗像恒次 (2001)：ヘルスカウンセリングにおけるスピリチュアリティ，気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング。ヘルスカウンセリング学会年報，Vol. 7，27-38.
- 23) 宗像恒次・高臣武史・河野洋二郎・デビット ベル・リンダ ベル (1987)：日米青少年家庭環境と精神健康に関する比較研究。昭和62年度厚生省科学研究報告書。
- 24) 宗像恒次 (2000)：進化するヘルスカウンセリングの今。第18回，ヘルスカウンセリング，3 (6)，P.102.
- 25) 宗像恒次 (1996)：行動科学からみた健康と病気。メヂカルフレンド社，pp.25-29，128-129.
- 26) 宗像恒次 (2002)：青少年引きこもり家族のSATイメージ療法。心身医学，42 (1)，37-46.
- 27) 渡辺久子 (2002)：心の発達と養育環境：精神分析理論。臨床精神医学，31 (5)，501-508.